



TITLE:

静脩 特集号 (1991.3): イギリス、ヨーロッパ及びアメリカにおける 書誌コントロール:現状と展望

AUTHOR(S):

フィリップ, ブライアント

---

CITATION:

フィリップ, ブライアント. 静脩 特集号 (1991.3): イギリス、ヨーロッパ及びアメリカにおける 書誌コントロール:現状と展望. 静脩 1991, 特集号: 1-10

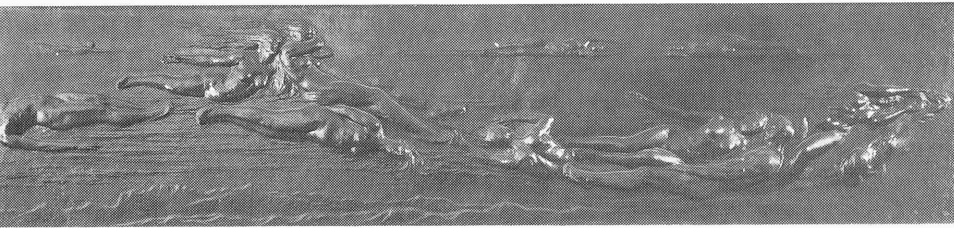
ISSUE DATE:

1991-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37833>

RIGHT:



# 静脩

1991年3月

特集号

The Kyoto University Library Bulletin

## イギリス、ヨーロッパ及びアメリカにおける 書誌コントロール：現状と展望

書誌マネジメントセンター（英国バース大学）長      フィリップ      ブライアント

大変美しい国、特に美しい京都に来られて嬉しく思っております。そして本日ここで講演できることを大変嬉しく思っております。吉岡事務部長と、そして部長の同僚の皆さんに今日ご招待いただいたことを感謝いたしますし、今私を紹介してくださいました辻本課長に感謝いたします。私は日本語で話したいのですが、今日の講演は英語で話すことにいたします。ただし、ゆっくり、はっきりと分かるようにお話いたしますので、もし分からないところがありましたら、途中でとめてくださっても結構です。

センター・フォー・ビブリオグラフィック・マネジメント（CBM、これから書誌マネジメントセンターと訳します）の仕事のうち98%は英国図書館開発部の資金の援助をうけて行われております。ですからそのディレクターのブライアン・ペリーさん及び開発部に対して深く感謝いたします。それから松村先生の個人的なご招待によってこの訪問は可能になりました。松村先生に深く感謝いたします。さらにブリティッシュ・カウンシルがこの旅行の援助をしてくださいました。今日はその森田さんがいらしていますけれども、ブリティッシュ・カウンシルにも感謝いたします。

松村先生のお名前を一番最初に申し上げるべきでしたが最後になりました。すみません。

私の家の書架にロックの『人間悟性論』<sup>(1)</sup>という本が一冊あります。その著者ジョン・ロックという人は、1632年に、私が住んでおりますところから30マイルと離れていないリントンという村で生まれました。ヨーロッパでは、18世紀の後半にあの人間精神の偉大なる開花、即ち啓蒙運動というものがおこりました。そしてこの啓蒙運動というのはロックの影響に負うところが多いのであります。ロックはイギリスの最高の哲学者の一人でありました。啓蒙運動の私にとっての大きな喜びというのは、あの人間の知性と精神のすばらしい解放の感覚であります。

ここではっきりさせておきたいのですが、私は日本の歴史及び文化についてはほとんど全く知りません。しかし、私は9日間の滞在の中で学んだことを含めまして、皆さんがたは1868年の明治維新につづいて皆さんがた自身の啓蒙運動をもっていらしたということを知っております。私が理解しておりますことは、徳川封建体制が数世紀つづいた後に、福沢諭吉といった人たちが人間の知的自由の理念というものを表明いたしまして、人類

本稿は、平成2年4月20日に開催した「近畿地区国公立大学図書館協議会・主題別研究会」の講演記録である。

の進歩の不可避性に対する信念を育むよう努力したことであります。社会の変化の必要性が至上命令であることをはっきりみてとる、そういう夢想家たちの多くが直面する困難は、彼らの解放的な思想というものが現実に行われている進歩の遅さに不満をもつようになって、最後には我慢できなくなるといふことであります。日本の啓蒙運動の時代というものは、物質革命であって、その人の言葉を使うと「魂を奪われた」ものであるといったのは、私が思うに北村透谷<sup>(12)</sup>でありました。ヨーロッパでロマン主義というのは功利主義的態度あるいはプラグマチックな態度に対する反動として花を咲かせまして、これは解放された思想の初期の波のもつ鋭い切っ先というものをなまぐらにいたしました。

私はロマンチストであると同時にプラグマチストであると思っています。私は理想主義者であり、私の仕事を動機づける指導原理というようなものを必要としておりますが、私は同時に理想というものはほとんど確実に達成できないものであって、最後には実際に可能なものに満足しなければいけないということも知っております。皆さんは、本日のテーマとこれがどういう関係にあるのか不思議に思われるかも知れません。本日の講演のテーマは先程ご紹介ありましたように「イギリス、ヨーロッパ及びアメリカにおける書誌コントロール：現状と展望」であります。その理由というのはどういうことかといいますと、その理想と実際に実現可能なことの間の相違というのが西洋で書誌コントロールに関して起こっている論争のまさに中心にあることであります。実際、私は本日の講演のタイトルを「純粋主義者とプラグマチスト」、サブタイトルといたしまして、「1990年代の書誌コントロールと書誌マネジメント」というタイトルをつけようとさえ思ったほどであります。

お気付きと思いますが、私がディレクターをしておりますセンターというのは「書誌マネジメント」センターでありまして、「書誌コントロール」センターではございません。この点を強調することは非常に重要だと思います。現在までのセ

ンターの役割というのは、みんなに受けいれられている知恵及び実践を吟味することでありました。そのセンターは目録規則とかフォーマット、規格に関する詳細な研究というものを熟慮した末に除外いたしました。むしろ、このセンターは、英国図書館研究開発局によりまして、目録の伝統的な性格と役割（あるいは、その存在の必要性についてさえも）、そういった規則及び規格の要件、それから、エンドユーザーに対する影響あるいは価値といったものを検討するために設立されました。

勿論、コントロールというものは我々の図書館のマネージメントの中核になければなりません。もし、我々の蔵書をよりうまくコントロールすれば、我々はその適切な利用を奨励し、そしてその効果的な利益回収をしやすくなるわけです。その利用は、個々のコレクションの利用、および協力的利用の両方を含んでいます。それらの内容の書誌的な記録は、そのコントロールにおいては本質的な要素であります。しかし、これは良い図書館マネージメントのプロセスの一つの局面にしかすぎないということを認識することが重要であります。図書館のマネージメントは建物、備品、設備そしてその蔵書をコントロールするための職員といったものが、書誌レコード及び目録と同時に必要なわけです。西洋、特にイギリスにおきましては、政治的及び経済的状況は、資源配分の圧力が図書館マネージメントの場において、かつてないほど顕著な特徴となっていることを示しております。個々の図書館をみましても国全体をみましても、書誌コントロールの要求を満たすために行われるべき投資は制約をうけております。

私が日本におります間に行いました他の講演では、バース大学のセンターでの研究についてお話しいたしました。その研究というのは、完全記入及び簡略記入目録についてであります。そこで、私はイギリスにおいて書誌レコードの内容に関して抱かれています生き生きとした関心についてお話しいたしました。私がそこで明らかにした一つの点は、目録作業につきまして個々の図書館レベルあるいは全国レベルいずれにおきましても、二つの学派がいまだに存在することです。第

一の学派というのは、財政的な圧力のために図書館界は現実的にならなければならない、そして高度に詳細すぎるような、あるいは複雑すぎるようなレコードをさげ、そして精巧な詳細な記述目録作業をつづけることに乏しい資源を配分することをさけるべきであると論ずる人たちです。

第二の態度というのは、過去20年以上にわたって自らを世界書誌コントロール(UBC)の理想にささげてきた図書館員たちの態度であります。世界書誌コントロールの基本的な考え方というのは、1970年代の初めに発展させられました。それは、ドロシー・アンダーソンによって1974年に次のように定義されております<sup>(3)</sup>。「世界書誌コントロール(UBC)という名称のもとでIFLA(国際図書館連盟)は次のような提案をしております。それは、ユネスコは一つの主要な政策として書誌情報のコントロールと交換のための世界規模のシステムの推進を採用するべきである、という提案です。このシステムの目的というのは、すべての国で発行されたすべての出版物についての基本的書誌データを国際的に受容可能な形態で世界中どこでも迅速に利用できるようにすることです。」

ドロシー・アンダーソンという人は、皆さんの中でUBCに興味をもっている人には知られている名前であると確信いたしております。彼女は数年前に退職いたしまして、現在バースに住んでおりますけれども、このことは私たちはしばしば会う機会があるということでもあります。私は先日、2週間前に彼女とまた昼食をとる機会を得ましたが、この時、我々はUBCの背景と現状について、いくぶん時間をかけて議論することができました。アンダーソンさんは、多くの国がUBCプログラムの要件をみたすために必要な資源を政府によって拒否され、そしてそれを実現することの利益が当局にいる人々に充分伝わっていないことについて失望していました。

より豊かな国々、イギリスとか日本のような国々というのは、ほとんど指数関数的といえるような毎年の出版点数の増加を経験しております。イギリスでは、1989年に61,000タイトルを越えて

いますし、今世紀の末には、年間9万点を越えるであろうとされております。そして更に、デスクトップパブリッシング(DTP)が出現したことによりまして、印刷は、勿論、いろいろなところで行われるようになりますし、印刷物ができるまでの時間が非常に短くなるわけですから、このことによって、書誌コントロールがますます複雑になるわけであります。そういう出版物の増加によりまして、国際は別にして、国内における義務を達成するために相当の財政上あるいは経費上の問題をもつようになっていくようでもあります。より貧しい国々では、出版点数というのは比較的少ないわけですが、彼らは、そのプログラムに効果的に参加するための資金を国内でもあるいは国際的にも調達できないという問題をもっているわけでもあります。

私は、ここで次のような見解を表明いたしました。それは、過去20年以上にわたって国際的に合意された規格に合致することの望ましさに注意がはられてきたにもかかわらず、異なる各国のマークが増殖しているということに驚きの念を禁じえないという見解であります。この異なるMARCフォーマットといえますのは、極めて初期の頃からLC MARCフォーマット、UK MARCフォーマットという異なるフォーマットの開発という形ではじまったものであります。実際に、その相違というのは一つの国の中でも存在するわけでありまして、図書館コオペラティブやその他の機関がレコードを他の機関と互いに交換することができないような状況になっております。その理由というのは、内容指示子が違う、特定のフィールドを互換性のないような形で利用する、その他の理由によるわけであります。

現在は以前ほどではありませんが、書誌規格及び書誌レコードの作り方に関する政策に疑問を呈すると言う点で、最も声が大きかったのは出版社でありました。1982年に彼らは、特に出版前目録作業(CIP)についての関心を表明いたしました。そこでは非常に強い批判がありました。例えば3カ国で出版された本が、最終的に三つの異なるCIP記入というものをタイトルページの裏にもつ

というような結果になるという事実に対して批判を向けたわけですね<sup>(4)</sup>。これは大きな負担でありまして、出版者たちは、こんなものなくてもやっていけると論じておりました。CIPを行うにはお金がかかりますし、本の生産の流れを妨げます。そういうわけで、彼らはCIPプログラムに参加することによって受ける価値に疑問を呈したわけでありまして。彼らにとって、CIPプログラムというのは、図書館員の専門職の秘術をみとめるために存在するものであって、明確に確定された利益のためではないと論じたわけでありまして。

マイケル・ゴーマンが編集いたしました、*Concise AACR 2*という本がありますが、この本を見たときに、私は出版社に対して同情の念を禁じ得ませんでした。ここにアメリカ図書館協会とイギリス図書館協会が共同で出版し、国際的な目録の専門家によって編集された目録規則集があります。この本のタイトルページの裏にあります二つの国内版のCIP記入というのは国際規格にしたがって編纂されたものであると考えられるわけですが、その二つが全く異なっていることを見付けたのは全く皮肉でした。これまで、大変批判的であった出版社たちになんという攻撃の武器を提供したことでありましょう。しかしながら、この状況というのは、IFLA/ユネスコの国際CIP会議、これはオタワで1982年に行われたわけですが、この会議の結果、若干改善されたと申し上げることができますのを嬉しく思います。

疑いもなくUBCの概念というのは、称賛すべきものであるとおもいます。その優れた特徴というのは、「国の大きさとか、発展段階に関係なく、すべての国々が貢献できる」ということが一般に受容されていることであります。

ハーマン・リーバースという人は、IFLAの元会長で、このUBCプログラムに対して最初に名前とアクロニムを与えた人です。この人が1980年に次のように書いております<sup>(5)</sup>。「ここに柔軟なプログラムをもって一つの試みがなされました。その試みとは、世界中の図書館の日常の定型業務を改善し、実際に定型業務を少なくする、そしてあらゆるタイプの図書館のあらゆる段階に

において革新的かつ創造的仕事をするために精神を解放するという試みであります」。これはまさしく、図書館に対する啓蒙運動のように聞こえます。しかし、リーバース博士はこう続けております。「しかしながら、その実現というのは別な話であります。単純な目標というのは、まったく異なる問題を生みだしますが、それは皆さんがコンピュータで作成される書誌記述のMARCテープをもち、それを使って仕事をするか、あるいは全国書誌をまだ作成できないでいる国の中で目録作業の問題を扱おうとするか、ということによって異なった問題となります。こういうことから、国際的な政府機関及び非政府機関の間の緊密、かつ深い協力が絶対不可欠になるわけです。」

もし、この必要な援助を得なければならないのでしたら、これは私がミセス アンダーソンにいったことでありますが、資金を提供する人々を説得できる証拠というものを提供しなければならない、その証拠とは、そうしたプログラムが（１）お金を節約するものであること、（２）多数の利用者に対してははっきり良いと分かるサービスを提供することであり、そういうことを証明しなければならないということであります。このことを証明するのは、容易なことではありませんし、私の知っている限りそうした研究は、これまで行われたことがありません。そうした証拠がもしあったとしても、望むこととは全く逆の結果をだすかもしれない私は考えているわけでありまして。UBCの主要な目標は、それぞれの国の書誌サービスあるいは機関がその国の出版物について確定的なレコードを生産する責任をもつことを奨励することによって、経済性を達成することです。理論的には、品質の高いレコードはただ一度だけ作成されればよく、その後それが国内及び海外の図書館のいずれによっても再利用されるということでもあります。しかし、ここで問題がありまして、集中化された目録作業というのは、常に一つの大きな欠点をもっております。それは何かと申しますと、あまりにもしばしば起こることではありますが、レコードを創成し、それを図書館に頒布するさいの遅れであります。この遅れが、良き

図書館マネジメントを妨げますし、お金をかけさせることになります。これは、集中化目録作業の目標からみますと、正反対のことになるわけです。図書館というのは、そのレコードを効果的に利用できるためには、迅速かつ、適時なサービスが必要であります。英国図書館の書誌サービス部でまだ目録がとられてないアイテムの滞貨というのは、3～4年前にはすでに4万タイトル以上のぼっておりました。この状況は危機的状況に近づいておりました。有名な新聞であります『ザ・タイムズ』に記事がでましたし、下院でもこのことについて質問が行われたことがあります。(書誌レコードについての関心が、このように国民的な注目を集めるといったことはそうしばしばあることではございません。)しかしながら、このレコードの頒布の遅れというのは、図書館員を別としましても、学者、書店、それから図書の世界にありますその他の人々、そういった人々に影響を与えているわけであります。何かが行われなければいけませんでし、すばやく行われなければいけませんでし。

英国図書館はその政策を見直しまして、1987年7月に『最新性と包含範囲』<sup>(6)</sup>と題する諮問文書を発行いたしました。この中には他の計画と並びまして、いくつかのカテゴリーの本につきましては低いレベルの書誌記述を与える、これは何のために行うかといいますとお金を節約するために低いレベルの書誌記述を行う、それによって資源をレコード作成のスピードアップのために再配分するということを含んでおりました。

バースのセンターは、1980年以来、UK MARC レコードサービスの達成水準をモニターしてきました。1981年から1987年までに、図書館が1974年以降イギリスで出版された図書の目録をとるためにレコードを必要とした時、図書館は、100タイトルにつき64タイトルしか英国図書館の UK MARC データベース中にレコードを発見することが期待できませんでした。英国図書館の最初の5カ年戦略計画、これは『知識と共に進む』<sup>(7)</sup>というタイトルをもっていますが、この中で、こう宣言されています。「全国書誌サービスの目録は、

1990年までに64%から85%までヒット率を高めることである」。いろいろな理由がありまして、その理由についていちいち詳しく説明する時間はございませんが、このヒット率85%は実際には達成可能ではありませんでした。しかしながら、明らかな改善が見られまして、過去2年の間に78%に高まったわけではありますが、少なくとも、この改善分の半分というのは新しい政策を採用したことに帰せられることが確実であります。それにもかかわらず、こういうことを見るのは面白いことでしたが、詳細度の低い書誌データが提供されるわけですけれども、それに対する最大の懸念が、それまで最新性の問題についてあれほど強く不満を言ってきた当の人たちによって表明されたことです。全国書誌サービスというのは、あまりうらやむべき仕事とは言えません。

しかしながら、こういう一般的な認識がございました。それは直面している困難にはイギリスの図書館及び書籍業界すべての部門の間で建設的な議論が必要だという認識です。「図書の世界における書誌レコード：ニーズと可能性」<sup>(8)</sup>と題する大きなセミナーが開かれました。それを補う形の二番目のフォーラムというのが、英国図書館協会及び MARC 利用者グループの共同でもたれました。この会議は「全国データベースの将来」<sup>(9)</sup>と題するものです。この二番目の会議は、図書館界の上級メンバー15人だけからなるもので、彼らは、「イギリスの図書館界はいかなる書誌データを必要とし、それをどういうふうに提供すれば最も適当か」ということを議論するために招待されたわけであります。この会議での2日間にわたる活発な議論の終わりに、我々は合意に到達する努力をいたしました。可能な限り努力した結果、次のような声明が全員の支持を得ました。「我々は全国書誌に関する努力は、次の二つのレベルにおいて存在することを認識する」。第一に全国的な永久記録的レコードの創成であり、この点に注目していただきたいのですが、図書館界によって助言されたように、このことは英国図書館が注意し、それに責任をもつことであります。二番目は、ユーザーがそこからいろいろな機能を実行することの

できるデータベースのネットワークを開発すること。そしてその調整は英国図書館が行うべきであるが、それに対する責任は、もっと広く分担されるべきであるということです。

その後、1988年に英国図書館は、全国書誌サービスが図書館界で必要とされる国内出版物に関するレコードを提供するためには、援助が必要であるということが認識されました。その少し前に、他に五つの法定納本図書館がイギリスにはありますが、イギリスの著作権をもつ出版物をうけとる他の五つの図書館もまた全国書誌サービスへのレコードを提供することができるべきであるという示唆が英国図書館に対して与えられました。1989年2月に英国図書館は次のような声明を発表いたしました。「イギリスの法定納本図書館六館は、イギリスの本についての書誌レコードの創成に関する協力プログラムを計画している。このプログラムはイギリスの全国書誌サービスのためであり、かつそれぞれの図書館の目録のためでもある」<sup>(10)</sup>。試行プロジェクトにつづきまして、プログラムの全面的な稼働開始の目標日として、1991年3月が設定されました。これは現在すすんでおります。法定納本図書館の分担目録計画の二つの目的は、「全国書誌サービスへのレコードの流れをスピードアップし、これによりすべての図書館におけるそのサービスの費用対効果比の高い利用を、それによって読者に利用可能な目録情報の最新性を改善すること。二番目に六館の法定納本図書館のコストを下げること」であります。このシステムの概要を申し上げますと、試行段階で検討され展開されました概要というのは、英国図書館が毎年70%、他の五つの法定納本図書館が30%、これは何に対する比かといいますと現在の目録レコードの全体への貢献分ではありますが、こういった割合をもつものであります。

私は先ほど、CIP に対していくつかの出版社がいただいております不満についてお話いたしました。しかしながら、1982年に開かれたオタワでの国際会議のすぐ後で、英国図書館は CIP プログラムを拡大し、質を向上させる、そしてこれを目録レコードの提供サービスの基礎にする、これに

よってヒット率を高めるという決定をいたしました。それに加えて、スタンドアローン型の統合図書館システム及びそれに付随しております受入れのモジュールが開発されているということは、図書館は、理想的には、図書が注文される時点で書誌レコードが必要であるということの意味するものであることが認識されておりました。実際に、CIP プログラムを発展させるというその決定は、全体的なヒット率にはほとんど影響を与えていませんでした。前のヒット率を維持して、それがもっと悪いレベルにおちるのを防いだということだけであるわけです。この書誌レコードの品質に関するのと同じ批判が CIP 政策に向けられ、これは後に最新性と包含範囲に向けられることになります。しかし現在、CIP レコードはイギリスの MARC レコードの全数量の80%を越えるにいたっております。

国内の図書館自身の内部的なニーズだけではなくて、より広い全国書誌、国際書誌の世界のニーズをみたと、適時性のある費用対効果比の高いサービスを提供するという問題は、イギリスだけが経験しているものではございません。このことはホープ・クレメント、この人はカナダ国立図書館の人ですが、この人の論文の中で十分に明らかにされております。この論文は *International Cataloguing and Bibliographic Control* 誌の1990年1月/3月号<sup>(11)</sup>にでております。ホープ・クレメントは、国際 MARC ネットワーク委員会 (IMNC、これは国立図書館長会議の中の一組織であります) の委員長であります。IMNC は、12の国立図書館の代表から成っておりまして、それらの図書館は、標準的な全国 MARC レコードの頒布に関心をもっている図書館であります。この国際 MARC ネットワーク委員会は、加盟国におけるレコード創成のプロセスを UBC の諸目的という文脈の中で調べるといふ調査を行いました。この調査は、受入れ機能から始まりまして、次に書誌レコードの創成にすすみ、その後、全国書誌の製品及びサービスにおける書誌レコードの頒布にまですすむものです。そしてここには、滞貨と戦い適時性を向上させるためのコストと方策というのも含まれてお



りました。この調査の結論は、私がここで、皆さんに少し前にお話ししましたイギリスの事情を、ほぼ正確に反映しているものであります。引用いたします。「人的資源と予算の制約というのが全国書誌の製品及びサービスの生産および頒布において最大の問題になっている。これらは、出版物の増加とまた結びついている。調査対象となったすべての図書館は、制約の多い環境、つまり資源が少なくなり、同時の量においても複雑さにおいても図書館サービスに対する要求が増えているという、そういう制約の多い環境の中で機能しなければならない。」さらにこの調査からの引用でございますが、共通して発見された問題は、国内出版物の受け取りが遅れるということであり、それは、特に法定納本の段階でみられる。次に出版物の増加と新しい資料の増加によって引き起こされる滞貨の増加。それから、書誌レコードの創成のプロセスにおける時間の長さで非常に複雑さ、特に典拠作業においてそうであること、その他、いくつかの複雑な書誌に関する規格を使わなければならないこと、それから常に変化していく規格の改訂にしたがう必要があるということである。

UBC の目的に関する現状をまとめる中でホープ・クレメントは、よく知られた問題領域を指摘しております。それは、カバーする範囲の包括性、目録規則の質、最新性、経済性であります。このうち、二つだけ詳しくお話しいたします。まず、目録に関する規格の質ですが、規格を少なくするという傾向が現在みられます。ただしこれは、いくつかの場合にははっきり感じとれるわけですが、規格が他の人の作ったレコードを簡単に、かつ受容できるような形で利用できなくなるような水準以下になってしまうという危険が現実存在するわけであります。そしてこのことは、UBC の目的そのものをないがしろにするものであります。経済性につきましては、目録作業のプロセスが簡略化されつつありますし、可能なところでは節約が実際に達成されております。しかし、現在みられる傾向は、コストを回復すること、元をとることが益々ふえているということでありまして、このことにより、幾つかの場合には、図書館の手に

届かないくらいレコードの値段が上がってしまうおそれがあるという点が指摘されました。私が知る限り、このことは、ヨーロッパの中でも、貧しい国々にとっての関心事であることは確かであります。

ホープ・クレメントは次のように書いております。「UBC の諸目的は、節約の時代においては、その目的どうしが互いに競合することが明らかであり、何らかの満足のいくような妥協点が、カバーする範囲、最新性、質の高さ、及び経済性などのもたらす利益を調整するなかで、見出されなければならない。」どうして私が初めに「純粹主義者とプラグマチスト」というタイトルを本日の講演につけようと思ったかが、もうお分かりになったと思います。

私は、ここで私が過去3年間にわたって参加してきた二つの活動についてお話ししたいと思います。これは、国際 MARC ネットワーク委員会の結論を、さらに強調するものでしかありません。私たちは、今日、「目録レコード」ではなくて、「書誌レコード」について話すことが多いわけですが、このことは、図書館のハウスキーピングシステムだけではなくて、書籍業界全体において起きている変化を反映しているわけであります。この書誌レコードというのは、現在では、あらゆる範囲の機能を果さなければなりません。

一年ほど前に私は、議会図書館 (LC) の招きで、議会図書館におきまして、逐次文献の保存管理について考えるための国際シンポジウムで講演する機会を得ました。保存といいますのは、最近、西洋におきましては、大変高い注目をあびておきまして、適切なプログラムを実行するための資源の問題というのは、非常に大きなものであります。製本がこわれてしまうとか、酸性紙が分解してしまうとか、虫の害がおこるとか、それらすべてが、それ以外のいろいろな本の破壊の徴候が、図書館界に、保存というのは緊急の問題であり、それは大量の資源を要求する問題だということを認識せました。私がこのシンポジウムで話したことは、「標準的書誌レコード」と、保存プロセスにおいて、保存の管理者に最も適切に情報を提供するこ



とによって、保存プロセスを援助する際の標準的書誌レコードの位置づけについてでありました。

私は、1986年の5月に議会図書館のUS MARCフォーマットの中に記録すべき保存情報の詳細に関するワーキンググループがすでにコストに対する関心を、そして引用いたしますが、「保存の目的のために追加されるデータ要素は、そのコストに見合うだけの、明らかな利益を与えるものでなければならない」<sup>(12)</sup>と表明していることに注目したと私は述べたわけであります。これは私の見解ではありますが、保存のためのデータ要素が、US MARCのレコードの中に含められるべきであるという、このワーキンググループの考え方というのは、明らかに重要なものでありますけれども、議会図書館自体も経済的問題になりますと例外ではない、議会図書館もまた最近、予算の削減に直面してきたわけであります。

私が参加してきました第二の活動は、カウンスル・オブ・ヨーロッパの遡及目録作業に関するワーキングパーティに関するものであります。遡及目録作業というのは、より正確にいいますと、遡及変換のことです。私は、このワーキングパーティのメンバーでありまして、このグループは、同カウンスルの閣僚会議によって昨年末承認された「勧告」<sup>(13)</sup>を提出いたしました。この勧告の第5パラグラフを読んでみましょう。「共通の書誌データ及びその変換された目録をつくるための正式の規則というものは、効果的に利用でき、かつ国内及び国外と効果的に交換のできる目録レコードを作れるような、最低の条件を満たさなければならない」。

この勧告についておりますテクニカルレポートでは、現在の目録作業のやり方において今述べました必要性というものは、ISBDの構造及びUNIMARCに従うことによりまして、最高の満足が得られるだろうと指摘されております。しかしながら、明らかになったことは、1970年以前（1970年というのは、ISBDとUNIMARCがIFLA-UBCプログラムの一部として発展を開始した年です）のヨーロッパの文脈におきましては、図書館の目録の方針及びやり方の多様性というものは、最低

の最も基本的なレベル以上のものを順守することを達成するには、受容できないくらい非常に高いコストに導くおそれがあったわけであります。妥協がここでもまた、進歩するための一つの方法であります。これはもちろん唯一の方法ではなかったわけですが、UBCプログラムの発展がなければ、ISBDの構造とUNIMARCの利用に対して妥協する、そして合意を得る、そういうところにいることはなかったわけであります。現在、OSI（開放型システム間相互接続）によりまして、その中で標準的な応用プロトコルというものが更に開発されますと、書誌情報の交換のためのネットワークの利用が容易になるということが言えるわけです。そのほかに、いろいろなプログラムとかプロジェクトがヨーロッパで行われたわけですが、それらについては単に列挙するだけにとどめておきます。

第一は、図書館の実践への新しい技術を奨励する、特に図書館協力に関するものでありますが、それは、ヨーロッパ共同体の本部（CEC）が作成いたしました野心的な『ヨーロッパ共同体における図書館のための行動計画』<sup>(14)</sup>とよばれるものであります。この計画というのは、計画の目標を達成するための五つの主要な行動細目からなっているわけですが、細目の（1）というのは、全国書誌及び遡及変換レコードの作成にとりまして、重大な関連をもつものであります。

その他には、ヨーロッパのマイクロフォームのマスターの登録簿をつくるというものがありますし、18世紀の出版物に関する簡略標題目録（ESTC）、それから、ヨーロッパのCD-ROMに関する協力プロジェクトがあります。このCD-ROMに関する協力プロジェクトは、IMNCの主導によって生まれたものであります。

1987年に国際MARCネットワーク委員会はイギリス、カナダ、フランス、アメリカ、ドイツ連邦共和国の国立図書館の代表者からなるワーキングパーティを設置いたしました。彼らは、全国書誌のためのCD-ROMの互換性をもつ規格を策定することは実現可能であるということを決定し、英国図書館は、実際に行う場合に必要と要求条件

の素案を策定するように頼まれました。このプロジェクトは、現在うまく進んでおりまして、ネットワークの場合と同様に、電子的なデータ転送のための規格及びプロトコルの策定というのが伝統的な書誌情報に関する規格よりも、書誌コントロールにとりましては、いっそう大きな関心をもつようになったことを示しております。

こうした理由から、私が信じていますのは、書誌コントロールを進め、発展させることに関心をもつ人々は、将来、いっそうの注意を、特に三つの領域に向けなければいけないということです。その三つとは、典拠コントロール、新しい技術が規格に与える影響、そして最後に国境を越えたデータの転送がますます増えるわけですから、著作権及びデータ保護の領域における立法化と合意であります。

最後のパラグラフに到達いたしました。私はこれまで規則とかフォーマットの詳細についてコメントするのではなくて、むしろ、規格を国内あるいは国際的な政策の問題として、実際に適用することにかかわっている人たちが直面している困難のいくつかに光をあててきました。私が扱わなかった問題で、かつ、日本でそれについて敢えて言及しようと思わなかったもの、それはキャラクターセットの話であります。私は、皆さん方が、漢字、ひらがな、カタカナのコンピュータ化の問題に取り組んできたやり方に対してただ称賛の声を送るばかりであります。私の親しい友人で品質

管理の専門家がおります。彼はお国の経営実践を研究するために日本に來たこともあります。彼はインスペクション（検査）と品質管理との本質的な違いについて、私に教えてくれました。彼が言ったのは、西洋では、しばしば、この検査と品質管理というものを混同しているということでもあります。私は、目録の分野におきましては、確かにそのとおりであると言いました。私たちは書誌レコードが生産された後でそれをチェックする、そういうことを行っているわけではありますが、彼は、日本で発展させられた形の品質管理というものは、実際にその製品を製造し、あるいは作り出す現実のプロセスの中において、業務のそれぞれの段階で失敗とか間違いとかいうものがシステムから取り除かれるようになっていくほど洗練されたものである、そういうことが品質管理なのである、と私に言ってくれました。おそらく、あなたがたの中には、私のこの意見に賛成するかどうか、後で話していただける方がおられると思います。しかしながら、西洋にいる我々のような人間にとってはよく知られていることばですが、若干間違えて引用されていることば、「最善というものは、良きものの敵である」ということばが、これから先もしばらくは真実でありつづけるでめしょう。誰がこれを言ったのでしょうか。ヴォルテール。議論の余地はあるかも知れませんが、ヨーロッパの啓蒙運動における最高の人物でございました。

どうもありがとうございました。

（原田 勝記）

## 参 照 文 献

1. Locke, John. *An essay concerning human understanding*; abridged and edited with an introduction by John W. Yolton. - London: Dent, 1977. ISBN 0-460-11332-1
2. Yamanouchi, Hisaaki. *The search for authenticity in modern Japanese literature*. - Cambridge: Cambridge University Press, 1978. ISBN 0-521-21856-X
3. Anderson, Dorothy. *UBC: a survey of Universal Bibliographic Control*. - London: IFLA International Office for UBC, 1982. (IFLA International Office for UBC Occasional Papers No. 10) ISBN 0-903043-38-6

4. Franklin, Norman. The publisher's view. In: Cataloguing in Publication: what is happening? Proceedings of a one day seminar held at the Library Association on 21st October 1981. *Catalogue & Index*, 63/64, Winter 1981/Spring 1982
5. Liebaers, Herman. *Mostly in the line of duty: thirty years with books*. - The Hague: Martinus Nijhoff, 1980
6. *Currency with coverage*. Consultative paper. - London: British Library Bibliographic Services, 1987
7. *Advancing with knowledge: the British Library strategic plan 1985-1990*. - London: British Library, 1985. ISBN 0-7123-4103-X
8. *Bibliographic records in the book world: needs and capabilities*. Proceedings of a seminar held on 27-28 November 1987 at Newbury. Compiled by Derek Greenwood. - London: BNB Research Fund, 1988. (BNBRF Report 33). ISBN 0-7123-3162-X
9. *MARC Users' Group/Library Association Forum on the future of a national database. (A report)*. - London: MARC Users' Group/Library Association, 1988
10. *British Library Bibliographic Services Newsletter*. 48, Feb. 1989, 2
11. Clement, Hope. National Bibliographic Agencies cataloguing survey. *International Cataloguing and Bibliographic Control*, 19(1) January/March 1990, 6-10
12. Preservation data elements discussed for USMARC. *Library of Congress Information Bulletin*, 45(31) 1986, 275-276
13. Council of Europe. Working Party on Retrospective Cataloguing. *Recommendation DECS/Rech (89) I and Technical Report*. - Strasbourg: Council of Europe, 1989.
14. *Plan of action at Community level aimed at library cooperation based on the application of new information technologies*. Luxembourg, CEC DGX III B, 1989.

## 謝 辞

英国書誌マネジメントセンター長 フィリップ・ブライアント氏の訪日は、図書館情報大学の松村多美子教授及びブリティッシュ・カウンシルのお世話であり、本学における講演は「近畿地区国公立大学図書館協議会・主題別研究集会」で行われたものであります。

欧米における書誌コントロールの現状について、当館報「静脩」に翻訳掲載を快よく承諾されたフィリップ・ブライアント氏及びお忙しい中、講演会での通訳と本稿翻訳の労をとっていただきました本学教育学部原田勝先生に厚く感謝いたします。

「静脩」編集委員会

---

京都大学附属図書館報「静脩」特集号1991年3月30日発行・編集：静脩編集委員会（責任者 附属図書館事務部長）発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・☎075-753-2613